

◆ 文献抄録

SUCCOR study : an international European cohort observational study comparing minimally invasive surgery versus open abdominal radical hysterectomy in patients with stage IB1 cervical cancer

Chiva L, Zanagnolo V, Querleu D, et al

Int J Gynecol Cancer 30 : 1269-1227, 2020

背 景 : LACC trial などから子宮頸癌の低侵襲手術は開腹手術と比較して予後が悪いことが報告された。このSUCCOR (Surgery in Cervical Cancer, Observational, Retrospective) studyの目的は、ヨーロッパの多施設における子宮頸癌IB1期の低侵襲と開腹の広汎子宮全摘出術の無病生存率を比較することであるが、副次的な目的として、腫瘍の飛散を防ぐ工夫と再発リスクとの関連を調査することである。

方 法 : 2013年1月から2014年12月に子宮頸癌IB1期に対して広汎子宮全摘出術を行った1,272例を対象とした。適応を満たした693例をIPTW (Inverse Probability of Treatment Weighted) を用いて低侵襲手術と開腹手術の無病生存率、全生存率を比較し、また低侵襲手術群で子宮マニピュレーターの使用群と腫瘍を覆い隠すように腔を閉鎖した群で無病生存率を比較した。

結 果 : 低侵襲手術は開腹手術に比べて再発リスクが約2倍高かった (HR, 2.07; 95% CI, 1.35 to 3.15; $p = 0.001$)。同様に死亡リスクは2.4倍高かった (HR, 2.45; 95% CI, 1.30 to 4.60; $p =$

0.005)。低侵襲手術の子宮マニピュレーター使用群で再発リスクが2.76倍高く (HR, 2.76; 95% CI, 1.75 to 4.33; $p < 0.001$)、一方で子宮マニピュレーター未使用群では開腹手術と同等の無病生存率であった (HR, 1.58; 95% CI, 0.79 to 3.15; $p = 0.20$)。また、低侵襲手術で腔を閉鎖した群は開腹手術と比較して同等の再発リスクであった (HR, 0.63; 95% CI, 0.15 to 2.59; $p < 0.52$)。

結 語 : この研究においても子宮頸癌における低侵襲手術の成績は開腹手術と比較して悪かった。しかしながら、子宮マニピュレーターを使用せず、腫瘍の飛散を防ぐために腔を閉鎖する工夫をすれば、開腹手術と同等な結果が得られた。

【コメント】 子宮頸癌に対する低侵襲手術はnegativeな方向性で進んでいたが、今後の前向き試験の可能性 (子宮マニピュレーターを使用せず、腫瘍の飛散を防ぐ工夫をした低侵襲手術 vs 開腹手術) を示した研究である。本邦では多くの施設で子宮マニピュレーターは使用せず、腫瘍の飛散を防ぐために腔を閉鎖する工夫がされている。今後、良い結果が出ることを期待したい。

寺尾泰久 (順天堂大学 産婦人科)